

西洋詩歌と和歌の無常観

WESTERN POETRY AND THE “MUJOKAN” OF JAPANESE WAKA

Alexandre DOLIN*

A special world outlook developed by buddhism and called “Mujokan” (conscience of inconstant, transient world) determined the main difference between Western and traditional Japanese poetics. For European poets of middle ages and New time the brevity of human life and the inevitability of death were the permanent source of bitter contemplations and pathetic lamentations. This world in their eyes was a sorrowful battlefield where Good was always fighting Evil and Death was challenging Life. Western mind reflected in poetry is seeking salvation in this struggle, convicting the realm of Evil and glorifying the realm of God, Love, Life. This poetry is dramatic in its essence from the beginning to the end.

In the non-dual mind of a Japanese poet (here we take for example only the poets of “*Kokinshu*” anthology) this world is full

*アレクサンドル・ドーリン モスクワ国立大学東洋学部日本語科卒業。ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員を経て、現在東京外国語大学助教授。文学博士。主な専攻分野は、日本の詩歌と詩歌論。『日本のロマン主義派と新体詩論』（モスクワ、ナウカ社）、『日本現代詩論』（同）など多数の著書がある。

of bitterness and joy in the meantime. Good and Evil perceived as the proper nature of life are inseparable. Western poetry can be designated as a search for truth of lonely restless and rebellious souls while Japanese poetry is only a search for harmony. Heian poets were ready to accept both Good and Evil caring only about how to express the sweet melancholy of “mono no aware”, the spirit of this transient existence.

We can barely find any historic elements in waka poetry without special commentary. Japanese poets prefer watching the changes of four seasons implying in these ever lasting images ever lasting human feelings and avoiding dramatic collisions. Tradition always predominates over individuality, and the poems are to be evaluated mostly from this standpoint taking into consideration all the conventional rules. That is why almost all the anthologies of waka except some family collections are compiled without any visual respect to individual talents whose works are dispersed instead of being united in blocks as they do in the West. Not the names but the poems themselves are of major value to the compiler as the continuation of tradition in this world of “mujokan”. Unlike their Western counterparts the hearts of Japanese poets are open to the past, not to the future. They follow the path of their predecessors having inherited their soul. And this also makes possible the immortality of this tradition in the changing universe.

二つの文化

世界文明の歴史とは地球上の諸民族の間の相互の「交流」の結果に他ならない。しかしヨーロッパの文化とアジアの文化の場合相互の対立こそが数世紀に

渡ってそれぞれの社会の歩みを決定していた。その二つの世界はそれぞれの伝統、習慣、信仰に基づいて進化していたので、それぞれの世界には独特な自然観と人間観、又は異なる芸術の原理が確立されていた。百数年前にその対立とお互いの無理解の時期が終わりをつげ、西洋世界と東洋世界は接近しはじめた。西欧にとっても日本にとってもそれは極めて意義深いプロセスになった。日本人は西側に先ず科学・技術発展の源を探し求めていた。一方西洋人は最初の段階には日本の文化に主として調和と安らぎの源を求めていたと思われる。理性的な西洋文明はその精神発展の限界を感じて人類を救うべき道を東洋の知恵から借りてこようという夢を抱いていた。

二つの世界大戦はキリスト教文明の精神的な価値の危機の証明となったが故に、多くの知識人は期待を込めて東洋の哲学、宗教文学に向かった。20世紀は欧米にとって日本文化の開拓時代となった。欧米の日本学者の努力により日本古典文学の多数の傑作が英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語に翻訳された。特に日本人の美意識は多くの学者、作家、画家の議論の対象となった。この発表の目的も西欧インテリにとって魅力的な日本の美意識を平安和歌を通して表す事にある。

歌の真心を求めて

平安時代には耽美主義が公家の生活の要となった。貴族の遊びは武芸と蹴鞠を別にすれば耽美崇拜と密接な関わりがあった。例えば花見、月見、紅葉狩り等、又は色遊びも「ものあわれ」を悟る道として理解されていた。公家の好きな遊びの内で物合わせは特に大切な役割を果たしていた。歌合わせの他に画合わせ、花合わせ、草合わせ、香合わせ等があった。和歌はその繊細優雅な遊びの言語となり、「心ある」人の交通コードとなった。当然、恋の告白の最も適当な形は歌であった。美の崇拜者にとっては短歌が唯一の雅語であって、歌詠みの天才は出世を保証し、色好みの言葉ともなった。平安時代以降和歌は宮廷作法の不可欠の要素となって、日本詩歌のユニークな使命がここに定まった

とも言える。

歌合わせでは歌詠みの規則が厳格に設定され、題の目録も決定され、歌に一定の特徴が備わった。宮廷和歌の主要なジャンルは即興詩であり、普通はある事件への感情的反響であった。日常生活の具体的な事実が和歌という間接的な形で描かれていたので場合によって題（テーマ及びタイトル）もしくは言葉書きを付け加える必要があった。歌物語のジャンルもその傾向を進化させたものだ。平安時代には叙事詩の一種であった長歌がほとんど消えてしまったので叙情詩が千年にわたって日本詩歌の歩みを規定した。解釈の付いた歌は現実と関連があったけれども、コンテキストから引き抜かれて解釈のない和歌は歴史的時間と空間に属しない「純粹叙情詩」のコードとなる。歌人の創造力は心の密かな動きに集中して、短歌を真珠のように磨き上げていた。その真珠は時と国境の限定を越えて現代まで生き残り、日本文化の永遠の宝となった。和歌に潜められた独特な美意識は我々にとって魅力がある。

奈良時代と比べて平安歌人の自然観そして人間観は著しく変わったと思われる。神道から派生した「古事記」と「日本書紀」の神話意識は背景としてずっと存在していたが高等教育を受けた宮廷臣達の知識の範囲は、漢学及び仏教がもたらした概念と原則に基づいて形成された。かつて「ちはやぶる神」の世に住んでいた人、大自然の力を信仰していた人は人生の単一の価値をもっと深く理解しはじめた。自然と人間の同一性の感覚が部分的に変化し、万葉集の「ますらおぶり」の歌の代わりに「もののあわれ」を歌う雅びに溢れる平安和歌が登場して来た。

「古今集」以降四季の移り変わりを通して人生の不変の悲しみを表していた和歌のリリカル・モードを現代の用語で評価してみれば、それは実存主義的世界観である。しかし東洋思想ではそれは無常観といわれるものであろう。

無常観の密かな楽しみ

西洋詩歌と根本的に異なる日本の和歌主要な特徴は無常観にある。キリスト

教の伝統にも人間存在の儚さを惜しむ伝統がある。特に有名な聖書のエクレジヤスト（「伝導の書」）の「全ては空の空なり」という言葉を想起すれば東洋的無常観の連想が直ぐ出てくるのではないか。しかし中世ヨーロッパの詩人にとっては人生の短さは耐えられない程恐ろしい事実である。人はその信心のお陰で救われる場合天国に行くが罪が多すぎれば地獄に落ちる。仏教にも天国と地獄の概念があるけれども業の教えもあるし、化身、再生万物流転の概念もある。それに中国の道教からとりいれた天地人の同一性の論説を付け加えなければならぬ。仏教の信者の眼にはこの世は苦しみであるけれども、しかしいったんその苦しみにうまく順応することが出来れば一生を楽に過ごすことも不可能ではない。すくなくともそれは平安の公家の人生観であったと思われる。つまりこの世が苦しみと悲しみの浮世であるなら、その無常性こそが慰みの元になりえないだろうか。数世紀経って江戸時代にその浮世の思想は小唄、春画等の慰み・娯楽文化現象を数多く発生した。

しかし平安時代に仏教がもたらした無常観は厳しい生活制限のきっかけとなるのではなく、むしろこの世をまさに楽しむきっかけとして説かれた。例えば遍照、素性等の名高い僧侶は宮廷で遊びを楽しんでいた。色好みの在原業平また小野小町の伝説もその証明になるのではなからうか。「源氏物語」、「枕草紙」等の平安文学の名作を読めば逆説的な結論が出てくる。その作品では寂しいものあわれのモチーフが響いているのに公家の生活はあらゆる遊びに溢れていて、心の悩みはその楽しみの不可欠の部分であったのではないか。無常観に起因する感情は当時の歌人にとって快樂の源となった。あわれを伝える歌の悲しい言葉は、実際にはさほど寂しくない生活の文化言語コードになる。

自然の心・人の心

人の精神が歌の対象となり、公家の眼に感情そのものが人生の意味と目的として見られることとなる。美しい自然もただ歌人の感動の背景と化かす。「万葉集」時代に人気であった単純な風景歌は「古今集」でほとんど消えてしまっ

て、その代わりにもののあわれを表す複雑なイメージが歌に織り込まれる。

- ・春霞なにかくすらんさくら花ちるまをだにも見るべきものを（貫之・83）
- ・山里は秋こそことにわびしけれしかのなくねにめをさましつつ（忠峯・214）

儚さ、この世の無常性はあわれを想起する美の主要な前提になっている。

- ・心あてにちらばやちらんはつしものおきまどわせるしらぎくの花（躬恒・277）

花が落ちるから花見に行く価値がある。紅葉も川に流れて消え去るが故にこそその紅錦に価値がある。この世は常なるものではないから永久に魅力がある。その魅力を感じ、悟って言葉又は画を通して表すのはアーティストの才能の最大の秘訣である。

- ・はなの木も今はほりうえじ春たてばうつろふ色に人ならひけり（素性・92）

歌人の心は天地の響きに共鳴して、彼の感動は自然の永遠の存在のドラマに巻き込まれている。それは一方的な繋がりではない。大自然は歌人の心を精錬し、アーティストの心もそれに恩返しをしている。

- ・おしと思ふ心はいとによられなんちる花ごとにぬきてとどめん（素性・114）

歌人にとって自然そのものは美の創造者であり、無限の美の宝庫である。日本美術の要もその原理にある。歌人はただ天地の様子を表す仲介者の役で登場する。一方西洋詩歌及び西洋美術にとってそれは非常に縁遠い信条だと思われる。例えばバイロンは詩人のアクティブな役割を強調しながら次のようにアーティストの使命を定義する。

「優秀な風景画家はある場所の景色を複写しないで、その風景画を全く改めて想像力を使って作りなおさざるを得ない。自然は彼に必ずしも描きたい有りのまま風景を与えてくれないからである。自然の中に隠れているポエトリーはアーティストの目標に応ずるには足りない。」

シェリーはその有名な宣言「詩歌の防衛論」で詩人は「偶然の印象の奴隷にならない」と書いて、詩歌は「創造力の実現に他ならない」と指摘する。

或いはエマーソンの意見を例に挙げよう。「自然の美は絶対美の完成形式ではない。それは人間の内面の美、精神の美を解放する手段として観られるべきものである。」

西洋の伝統では詩人の役割は聖人、予言者、判事の役割になる。ロシアの大詩人・プーシキンの言葉を借りれば

詩人よ、汝は王様だ。自由な心がなれを導く彼方へおもむき
思いだけに頼り自然にも群衆にもへらわずに一人で暮らせ

そのような考え方は勿論文学・芸術の分野とは限らず、一般の自然観にも西洋・東洋の対立を明示するのではなかろうか。西洋思想は人間の創造力による自然の克服に向かっているが、東洋思想はその反対に自然との密接な関わりを人間存在のいたる分野に探し出している。詩人、美術家等の「心ある」人の課題はその関連の特性を理解して、歌なり画なり曲なりを通してそれを明るみに出す事にある。

日本の詩人、特に歌人と俳人にとって歌論、俳論の原理・もののあわれ、幽玄、わび、さび、雅び等は自然の密かな美を現す方法に過ぎない。その意味で古典日本詩歌は自然の声とも言えるが、ヨーロッパの詩歌は人間の理性と情熱の声となる。それ故に和歌の調和は挽歌のムードに近い。愛の悩みも友の死を惜しむ歌も花盛りを楽しむ歌も音数律に込められた瞑想歌になる。この世にもものあわれを見つけてそれを歌で伝えるのは、万物等しく苦しみも楽しみも抵抗なしに歓迎するということになるのではないか。

そのためかも知れないが和歌が提示したものは自然の移り変わりと永遠の人情に限られた。歌に歴史観がなく、短歌と当時の歴史的事実の間の関連が驚くほど薄い。歌集の編集者の解釈がなければほとんどの名歌は時間的な関わりがないと思われる。その結果、逆に和歌の傑作は古くならず千年以上日本の読者に崇拜されている。

規範書の制限

自然観又は美意識の特徴は美術や文学の規範書に書き留められ作風の中にもよく見られる。西洋詩人はその感情、思考、全ての心の動きを詳しく描き、風景も「精神の美を解放する手段」として油絵のような手法の細かさで徹底的に描きだされている。様々な韻律、詩形、詩の種類があり、詩の長さもテーマの選択も余り限定されていない。詩人の思考はジャンルの規則にしたがって自由に流れている。

一方和歌では規範書の制限は余りにも厳しくて、手法ももっと慎重になる。歌人は31音で具体的な状態を描くことは出来ない所以和歌では叙述的要素はないのだ。題が付いていない場合に歌の内面の意味又は著作のきっかけを解説することは不可能である。著者は自然のイメージで余情を通じて当時の瞬間の印象と感動を届けると言う目的を追求している。

- ・風ふけばおつるもみじは水きよみちらぬかげさへそこに見えつつ（躬恒・304）

このような印象を伝えるためには西洋詩人なら恐らくけっこう長い詩を書かねばならないだろう。しかし和歌の余情によらなければ瞬間の印象は伝えられない。そうして歌の余情に呼び起こされた感情と連想は必ず同じ文化育ちの読者や聴取者を前提とする。西洋詩にはこんな直接的な発言・受信の結びつきがないが、日本の歌にとって当たり前のことだ。読者の教育レベルまたは詩歌規範の知識が高ければ高い程、和歌の理解も深く、技能のインパクトも強くなる。一般の日本人及び翻訳を読む外国の読者は外面のイメージを掴むことしか出来ない。他方著者と同じ様な教育を受けた和歌の専門家は、歌の音声を楽しんだり、掛け詞、縁語、枕詞等の手法を評価したり、他の有名な歌人の作品と比べたりしている。「新古今集」以来歌論の不可欠の要素となった本歌どりと言う手法はその密接な関連の証明ではなかるうか。

歌論の主要な原則はなるべく少ない言葉をもって最も深い余情を呼び起こすことである。そのため歌人は西洋詩人と違ってその作品の対象全体を描写する

のではなく、その代わりに連想をもたらす意味深い点だけに集中する。

- ・あはれてふことをあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらん（紀利貞・136）

歌の「あはれ」は四月に遅れて咲いた侘しい花にある。このようなイメージは日本の詩人にしか作れないだろう。勿論平安時代の読者にとって遅れて咲いた桜のテーマはこの歌にかぎらない。似ている短歌の一連は直ぐ頭に浮かぶ。例えば

- ・なきとむる花しなければ鶯もはてはものうくなりぬべらなり（貫之・128）

短さにもかかわらず歌はあらゆる題に従いながら無数のバリエーションのお陰でテーマを全面的に紹介している。一首の短歌が一個の真珠となれば、歌集に集まった同じテーマの歌真珠の美しさを立派に表す首飾りとなる。その意味で一つ・二つの短歌の感想と歌集のコンテクストで読まれた一連の歌（それとも一人の著者の連作）の感想は違うだろう。当然平安文化育ちの公家は自分の歌も相手の歌も文化背景の枠の中で知覚していた。だからこそ歌人が直面していた一番難しい問題は規範書の規則であった。つまり歌論の規則と個人的表現の間のバランスを崩さないことはもっともデリケートな課題となっていた。

久松潜一の意見によると、「古今集」以来和歌には特別の「あわれ」の美学ができた。そのあわれは三つの形式、すなわち感動美、調和美と優美で表現されている。しかし当時の歌論（貫之の序、藤原公任、藤原俊成、藤原定家等）の著作では別の用語が使われている。それは歌の「こころ」、「まこと」、「ことば」、「さま」、又は「すがた」等である。

ところで貫之の序について言えば、彼の六歌仙の評価は余りにも厳しすぎはしないかと思われる。その序によると六歌仙の内でも一人も完成した調和を達していない。遍照は「歌のさまはえたれども、まことすくなし」、業平は「その心あまりて、ことばたらず」、小町は「あはれなるやうにて、つよからず」、黒主は「そのさまいやし」等。

とにかくその多数の「欠点」にもかかわらず平安時代の和歌は驚くほど豊かな技巧を表している。自然の様々なイメージは詩人の心の憧れの比喩となり、諷諭および例えとして上手に使われている。

- ・花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに（小町・113）

この名歌は掛け詞の効果のお陰で連想の範囲が広がって無常観の憂いばかりでなく、小町の個人的な自分にしか分からない心の悩みを歌っている。

ある西側の研究者の眼で見れば平安和歌は法典のために個性を失い、同類の歌が多すぎる。子規も「古今集」を鋭く批判したという事実は良く知られている。しかし当時の歌論の規則をふまえて読めばその歌には個性も特性もある場合も少なくない。そして和歌では激しい情熱が極めて珍しいのになたとえば小町のある作品は西洋叙情詩らしく情熱に溢れている。ただ和歌には理性的抽象観念がないから歌人は自然のイメージ・花鳥風月体を通してその感情を表さざるを得ない。歌人の才能のレベルは無常観の感覚と和歌規範の理解の程度によって異なってくる。

和歌の魅力の問題

皮肉な事に現在日本和歌の魅力は日本よりも西洋世界で高く評価されている。科学技術革命の時代に育った日本人の若い世代は和歌の無常観に関心を失って、その魅力を感じていないように思われる。国文学の学生、和歌の研究者及び少数の知識人以外和歌を読む日本人は多くないだろう。若い世代にとって和歌は時代遅れであり、無常観は技術進化に相応しくない世界観である。若者は短歌に祖父の遺産を見て、歌の言葉が古臭く、文法が分かりにくく、イメージが曖昧だと思うのではないか。

一方アメリカ或いはロシアの読者にとって和歌はエクゾチックな「美しい日本」の文学の宝である。その魅力は余りよく知られていないけれども確かにある。いわゆる文化的好奇心も、コントラスト文化の魅力もある。後は全て翻訳にか

かっているとも言えよう。勿論翻訳は原文に比べて余情が薄くなる。その代わりに言葉が分かりやすくなり、表現は現代の標準語と余り変わらない。そうして実存主義哲学と文学の経験を持つ西側の知識人には無常観の本質を理解することが出来る。

翻訳者がいかに和歌の「心」と「まこと」を伝えるかということによって翻訳の魅力のインパクトに相違はあるけれども、成功した翻訳の場合に千年前に作られた歌は素晴らしい外国語の詩に生まれ変わる。日本の古典詩歌が戦後アメリカの現代詩に大きな影響を及ぼしたのも偶然ではないだろう。21世紀はある意味で和歌のルネサンスの時代になりうるが、そのルネサンスは日本ではなく、むしろ欧米諸国において始まるのではなかろうか。

討議要旨

千葉宣一氏よりつぎのような質問がなされた。「世界文学の中で存在と時間の本質を無常性において認識したのは、ベルシャの詩人オマル・ハイヤームの『ルバイヤート』が典型だと考える。その11～12世紀の美的リリズムは国際的普遍性において典型的なものだと思うが、無常観との対比においてどのように考えておられるか。」発表者は「回教の世界、キリスト教の世界、仏教の世界では、『無常』に対する理解は根本的に違うと考えている。オマル・ハイヤームの場合も、概念的に似たモチーフはあるが、和歌とは違うコーランの教えにもとづいた人生観がある。オマル・ハイヤームと『古今集』の歌を比較することは可能だが、一首ごとにその特徴を分析して行わなければならないだろう。」と回答された。千葉氏は「厳密な反論を展開したい」とされたが、討議の時間などを勘案し、その場での反論をひかえられた。飯島武久氏から「『挽歌』といったものを考えてみても、世界的に無常観と類似の考えはあるだろう。誰もが死に滅びていくという思想は、はやくから日本人もヨーロッパ人も受け入れている面があるはずだ。もちろん日本では仏教的色彩があるので、違った側面があるだろうが、無常という考え方はある程度共通しているのではないか。」と意見が述べられた。発表者は「和歌にとっては、無常観そのものが、和歌の技法になっている。無常観のない歌はありえなかった。そういう例はヨーロッパでもどこでも無いのではないか」と答えられた。